

言語接触による言語変化と文法化現象の一例

— 台湾中国語 “有” 構文の分析を中心に —

陳麗君

(国立成功大学台湾文学系)

1. 台湾における言語接触

1.1 言語接触の歴史

現在、台湾は三種類の漢語、すなわち台湾閩南語（以下台湾語）¹、客家語、台湾中国語（以下中国語）および14以上のオーストロネシアン語が混在する多言語文化国家である。しかし、公的な地位を得た中国語以外のエスニック言語はほとんどが危機言語に陥っている（黄宣範 1995, 陳麗君 2010c, Cheng 1985, Yeh, Chan & Cheng 2004, Young 1989）。台湾の歴史を殖民史的な観点からみると、「クロスカルチャー」は台湾文化の特性であり、「言語混合（code mixing）」は台湾言語の特質だと言える。台湾における言語接触の歴史および言語状況を表1に示す。

台湾では、近400年の間に、五つの外来政権、四種類もの権力言語（オランダ語、漢文、日本語、中国語）が土着言語と接触してきた。オランダ時代や鄭成功政権は台湾を経済利益や戦略的な一時基地として扱ったため、土着言語に言語変化（消失あるいは変質）をもたらすほどの言語接触はなかった。とはいえ、オランダ時代では伝教師による聖書翻訳や、土地売買や毛皮交換などのためのオランダ語と南島言語のシラヤ語（所謂新港文書²）との翻訳対照文が作られ、これによって土着言語の文字が成形された（図1）。その後、中国沿岸から大量に移民してきた漢人もこれを模倣し、図2のようなシラヤ語漢文による「番仔契」が作

られている。なお、清朝統治後、政権を掌握した漢人勢力が強くなり、また大規模な移民もあって、平地に残っていた先住民（平埔族）が同化されていき、シラヤ言語は文字とともに消え去っていった。その後の日本統治時代では、台湾に近代教育が導入され、同化政策がとられた。王育徳（2011）は日本による言語政策を3段階に分けている。統治初期はいわゆる間接教育法によって日本人が台湾語を習得することを奨励し、台湾語による日本語教育の方針を取ったが、1912年からはいわゆる直接法により日本語で日本語を教授する方針に転換した。日本語が普及するようになった1937年には、漢文の新聞雑誌を廃止し、さらに二次大戦になって「皇民化」教育の提唱、1943年には義務教育制度の導入によって、台湾人児童の小（公）学校の入学率が1929年の30.68%から1943年には70%に上がった。これにより、日本語は初めて台湾諸言語に浸透した外来言語となった。しかし、第二次大戦後、中国国民党が台湾人の新たな統治者となり、日本語教育を受けた台湾の人々は瞬時に中国語“文盲”になった。中国国民党は、初期の言語政策では台湾人の「民族意識を“回復”した。そこで、言語心理を“建設”すること³を目的とし、台湾語を利用して日本語という「毒素」を切取るという方法を採用して台湾語で中国語の教育を行ったが、統治後わずか10年間経った後の1956年には台湾語を全面的に禁止し、中国語による教育に切り替えた。ところが、1970、80年代からの台湾意識の高揚と民主化運動の成果が実り、台湾歴史上初の総統直接選挙が1996年に行われ、

¹ 日本統治時代では、過去中国福建を中心とした移民が多かったため、閩南語を用いる人口は80%を超え、その結果日本の「日本語」に対立した台湾の「台湾語」という地位を得た。

² 土地売買の新港文書による二言語併記契約書は1683年のものから次々と発見された。1813年の漢文とシラヤ語によるものは最後に見つけられたものである。

³ 1946年「台湾省国語推行委員会委員長」魏建功が5月28日の新生報「国語」第二期で「何以要提倡臺灣話學習國語？（どうして台湾語を提唱して中国語を学ぶのか。）」という文章を発表した。

表1 台湾の歴史と外来言語との言語接触

時期	統治階級言語	被統治者言語	使用文字
(1) 先史時代 (1624年以前)	先住民オーストロネシアン (南島語族)	なし	30種以上の南島言語
(2) オランダ時代 (1624-1662)	オランダ語 (Dutch)	南島言語	ローマ字 (1683-1813)
(3) 鄭氏政權時代 (1662~1683年)	官話	南島言語, 中国南部沿海諸 方言	漢字 (H), ローマ字 (L)
(4) 清朝統治時代 (1683~1895年)	官話	中国南部沿海諸方言, 南島 言語	漢字 (H), ローマ字 (L)
(5) 日本統治時代 (1895~1945年)	日本語	台湾語, 客家語, 南島言語	日本語表記 (H), 漢字 (L), ローマ字 (L)
(6) 中国国民党統治時代 (1949年~1996年)	中国語	台湾語, 客家語, 南島言語	漢字 (H)
(7) 民選総統時代 (1996年~)	中国語	台湾語, 客家語, 南島言語等	漢字 (H), ローマ字 (L), 漢字 ローマ字交じり

注: (H), (L) はそれぞれダイグロシアにおける high language と low language を表す。



図1 新港文書 (Sinkang Manuscripts) (17世紀後期~19世紀前期)。聖書の翻訳, 左側はオランダ文, 右側は新港文 (新港社の平埔族)。

台湾人が初めて政権を握ることができた。2000年からは形式的ではあるが, 小学校で郷土言語授業(週に1回40分ほど)が施行されるようになり, 2007年までに台湾各大学に台湾言語・文化関係の

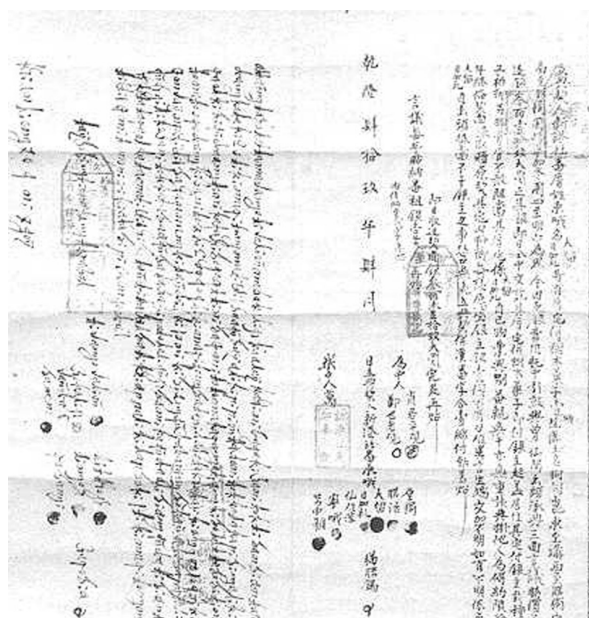


図2 シラヤ語と漢文が併記された土地売買に関する契約書。左側はシラヤ語で, 右側は漢文である (1784年の物)。

学科や大学院が30か所ほど設置された。中国語はすでに新しい世代に定着し, 各エスニック言語は退化してしまった状況である。しかし, 台湾諸言語は中国語との言語接触によって独特なクレオール⁴である台湾中国語に再編成された。本稿

⁴ ここでのクレオールは広義的に「意思疎通ができない言語間で話者間によって自然に作り上げられた言語(ピジン言語)が, その話者達の子供によって母語として話されるようになった言語」を指す。例えば, シンガポールの英語のシングリッシュで例えられる。

では台湾言語と密接に接触した順に日本語および中国語との言語接触に注目し、言語接触によって生じた音声音韻変化・語彙借用・コードスイッチングなどの言語現象を取り上げ、さらに文法化現象の一例として台湾中国語の “有” 構文に分析の焦点を絞る。

1.2 日本語との言語接触

日本語は一時リングフランカにもなった。日本統治末期の国語教員川見 (1942:34) は「本島人の用ゐる国語は形成つゝあるやうに思はれる」とし、「内地人中流家庭の夫人と、本島人野菜行商人との会話」という「破格の国語」の例を挙げた。(夫人)「リーヤ(汝), チレ(此) 幾ラアルカ / (行商人)「チレ。一斤十五銭アル」 / (夫人)「タカイタカアルネ, マカルアルヨロシイネ」 / (行商人)「タカイナイヨ, オッサン(奥さん) ロコモ(何処も) 十五銭アルヨ, アナタ, ワタシ, ホーユウ(朋友) アル, ヤスイアルヨ」 / (夫人)「ウソ言ヒナサイ。ドコノ野菜屋モ十二銭アルヨ, リーノモウ買ハンヨ。外ノ買フカライランヨ」 / (行商人)「ホー, ホー, ヨロシ, ヨロシ, オッサン, マケルアルヨ。イクラ買フアルカ」。

このように台湾語と日本語の接触によって発生したピジンの例もみられた。しかし、中国語政権による日本語の全面的な禁止、もしくは日本語が台湾言語の類型とかけ離れているからなどの理由により、日本語から台湾言語への影響は、現在では語彙レベルに留まっている(陳麗君 2010a)。例えば台湾語には以下のような定着した借用語が見られた⁵。

(1) 台湾語における日本語からの借用語 (loan word)

A. 日本語音を借りたもの:

a. 音を借りたもので、漢字表現があるもの

例: tha-thá-mih 榻榻米(たたみ), o-lén 黒輪(おでん), o-bá-sáng 歐巴桑(おばさん), bá-suh 巴士(バス), mó-tah 馬達(モーター), ma-sá-tsih 馬殺雞(マッサージ)

b. 音を借りたもので、漢字表現がないもの
例: se-bí-loh(せびろ), o-sí-bó-lih(おしぼり), lin-goh(りんご), bá-tah(バッテリー), tho-lá-khuh(トラック)

B. 漢字表記を借りたもの:

a. 漢字表記を借りたもの

例: kháo-tsō(口座), pên-só(便所), tsut-tiunn(出張)

例: jn-khì(人氣), hòng-sàng(放送), kán-sim(感心)

C. 音と漢字とも借用:

例: mí-soh(味噌(みそ)), sú-sih(寿司(すし)), an-nai(案内(あんない))

(2) 造語 (loan coinage)

A. 新造語 (loan creation):

● Hái-kat-lah(ハイカラ) → 西裝頭(七三分けの髪型)

● ドラえもん → 機器貓小叮噹 → (二次借用) 哆啦 A 夢⁶

● アラフォー (Around forty) → 熟女在身邊

B. 複合新語 (composite coinage)

● khī-mō-bái → khī-mō + bái (不愉快)

● khī-mō-giang → khīmō + giang (愉快)

● ta-ma-khong-ku-li → a-ta-ma + khong-ku-li (頭悪い, 融通きかない)

● ta-ma-sioo-to → a-ta-ma + sioo-to (頭ショート, 考えがおかしい)

1.3 台湾語と台湾中国語との言語接触 — 言語混合 Code mixing

1.3.1 二言語接触による音声・音韻系統の変化

(1) 台湾語の変化: /g/, /j/, 閉鎖音などの消失

⁵ 日本語からの借用は時期によって、日統治時期と国府戒嚴(1987年)以後に分けられるが、ここでは主に日本統治時期による例を挙げる。

⁶ ここで挙げた新造語の例「ドラえもん」と「アラフォー」は日本統治期に流布したものではない。

表2 台湾語と中国語との相互的コードスイッチング 出典：陳麗君 (2007: 251)

面会回数	第一回		第二回		第三回		第四回		第五回	
	中	台	中	台	中	台	中	台	中	台
単語総数	1740	84	1425	102	1362	168	1343	748	1299	1002
コードスイッチングの方向	中→台	台→中	中→台	台→中	中→台	台→中	中→台	台→中	中→台	台→中
感嘆詞 (interjection)	26	0	21	0	3	0	27	0	25	0
語気助詞 (postpositional particle)	10	0	6	0	10	0	18	0	5	0
詞 (word)	0	0	0	4	0	12	0	41	0	84
短句 (phrase)	2	0	0	0	2	0	1	0	9	4
代名詞組 (pronoun group)	2	0	0	0	0	0	7	0	4	2
組 (group)	2	0	7	0	3	0	15	13	14	15
小句 (clause)	0	0	1	0	16	0	15	10	13	14
句 (sentence)	2	0	4	0	8	0	4	6	3	6
段落 (paragraph)	0	0	0	0	0	0	5	1	3	1

数字単位：単語数

注：「→」はコードスイッチングの方向
「中→台」は中国語構文から台湾語に切り替えること

例：子供 /gin-á/ → /_in-á/

例：ピーナツ /tho-tau-jín/ → /_tho-tau-lín /⁷

例：アヒル /ah- á / → /_a-á/ , 水をかける
/ak-tsuí/ → /_a-tsuí/等

例：有 /iou/ → [iø] , 我 /uo/ → [_o] ; [uø]等。

(2) 台湾中国語変化の特徴：

A. 巻き舌音の不在

- [ts] (資 zi), [tʰs] (詞 ci), [s] (似 si) と, [tʂ] (知 zhi), [tʂʰ] (吃 chi), [ʂ] (是 shi) との分別は発音上ではほとんど見られない。
- /r/ (人) → [l], [z], [dz]。台湾語には巻き舌音 [r] がいないため、中国語の /r/ を [l], [z], [dz] に発音する傾向がみられた。とはいえ、台湾語母語話者が減少するとともに /z/ と /dz/ の発音も減少する傾向にある。いまは [r] → [l] の対応がほとんどである。
- [l], [n] の混淆。例：中国語の冷 [leng] を [neng] と発音したりする。

B. 複母音が単母音に

台湾語には /iou/ , /uo/ などの複合母音がないため、台湾中国語は単純母音化しがちである。

1.3.2 二言語相互の語彙借用とコードスイッチング

中国語と台湾語のバイリンガルは様々な言語内の理由 (語彙借用, 表現語感) および言語外の理由 (場面や話題や相手に応じて使用言語を切り替える状況コードスイッチング) によって、戦略 (strategy) 的にコードを切り替えている。

また、台湾語と中国語と間の語彙切り替えは相互に大量に起きるものの、均衡的とは言えない。バイリンガルの自然会話において、中国語から台湾語へは感嘆詞や語気助詞を一方的にコードスイッチングする。一方、台湾語から中国語へは語彙 (word) でコードスイッチングすることが多かった (陳麗君 2007: 251)。

1.3.3 語彙借用によって新しい文法現象を起こす場合

(1) 不錯 吃 (悪くない (台) + おいしい (中国語) = まあまあおいしい)。

中国語の「不錯」はもともと動詞「錯 (間違える)」の否定で「間違いない」の意味であり、単文で使われることが多い。台湾語の「bē-pháinn (悪くない)」はよく動詞と結び付いて「bē-pháinn 食, 看 (結構おいしい, 結構きれい)」のように副詞的

⁷ ただし、方言学の見地からすれば、/j/ と /l/ の発音は地方によって異なっている。例えば嘉義と高雄では /l/ で発音するが、台南では /j/ で発音する。しかし、省力原則から考えれば所謂地方音が /j/ から /l/ に変化したことも考えられる。

に用いられる。それをそのまま中国語に転用し、当て字を「不錯」にして、語意は中国語の「好吃(おいしい)」と「不好吃(おいしくない)」の中間程度の形容表現「まあまあおいしい」という語用的に便利な表現が生じた。しかし、中国語の文法からみると、「不錯 吃」というのは動詞の否定あるいは形容詞+動詞という奇妙な構文であろう。このような創作表現は台湾町中によく見られる台湾語の借用による中国語構文の統語・意味上の錯乱の一例に過ぎない。

逆の例を見てみる。台湾語疑問表現には日本語の疑問詞「か」や中国語の「嗎」に相当する疑問詞がなく、主に反復疑問文や例(2)aのような動詞の前に「kam」を置くことでyes-no疑問文を作る。しかし、最近の若者が用いる台湾語の疑問文は(2)bのような中国語の疑問詞「嗎」を借りる表現が一般的となっている。

- (2)a. 你 kam 欲去? (あなたは行きます?)
 b. 你欲去嗎? (あなたは行きますか?)

以上は、言語接触による語彙借用・音声音韻変化・文法干渉の現象を大略的にみた。次は言語接触による文法化現象を考察する。

2. 言語接触による文法化現象

文法化(Grammaticalization)の定義について、Lehmannは「より文法的でない状態から、より文法的になる過程」と定義している(Lehmann 1982: 119)。Hopper and Traugottは、文法化は「語彙項目(内容を表す語)が文法(機能を表す語)になる過程」であるとしている(Hopper and Traugott 1993:4, 8)。さらに、語意と文を区別する特質が通時的に生まれたり共時的に編成される過程であるとも述べている。通時的にみると、文法化は次第に変化する漸次的過程であり、「Aは、ABという中間的段階を経ずしてBにはならない」として、次のような一方向的な過程モデルを掲示した(Hopper and Traugott 1993:36)。

B
 A > > B
 A

また、Hopper and Traugott (2003: 3)によれば、80年代以後文法化は主に二つの観点から研究されてきた。一つは歴史的な見方で、文法的な形式の源を探り、また文法的な形式に及ぼす変化における典型的な道筋(pathways)を追求してきた(Lehmann 1982)。もう一つの観点はより共時的であり、文法化を主として統語論・談話語用論の現象(discourse pragmatic phenomenon)としてとらえ、言語使用を流動的パターンとして研究してきた(Heine and Reh 1984, Heine, Claudi and Hünemeyer 1991)。Heineらの焦点は、文法化を動機付ける語用論的・認知的要因と、文法化する時の意味変化に当てられている。また、Givon(1979)は言語の規則や範疇が本質的に機能に依存することを強調した。彼は提示した会話の形式は漸次変容の上であり、子供と大人、クレオールと標準、計画的と非計画的、語用的と統語的などといった二つの極の間で変化するものとして捉えた。

基礎語彙が文法化しやすいとの報告も多い(Hopper and Traugott 1993:97, Heine *et al.* 1991: 31-32, 日野 2001:84)。日野は通時的な観点から、メジャーな品詞は文法化しやすいと主張し、日本語の名詞や動詞が文法化した例を挙げた。例えば動詞の例として、「出す」「上げる」は動詞から補助動詞「__出す」「__あげる」へ、名詞の例としては、「あと」「あいだ」「うち」がそれぞれ名詞の「足跡」「間」「内」から接続詞の「__の後で」「__のあいだ」「__するうちに」へ変化した(日野 2001: 84)。Li and Thompson(1976:485)は中国語「把」動詞(取る)を目的格の助詞として再分析した。目的格助詞である「把」には、もはや「取る」の意味はなく、目的格を表す文法的機能を持つのみで、意味が希薄化したといえる。英語では本動詞から助動詞への変化例がたくさんあるとされてい

る (Bybee 1985, Bybee and Dahl 1989)。例えば、現代英語の動詞 have も have a book のような本動詞から準 (quasi-) 助動詞 have a book to read (読むべき本を持つ) と have to read a book (本を読まねばならない) を経て、have read a book のような助動詞になっている。さらに、we' ve built a new garage のように、助動詞は接語になることもある。共時的な再編成という観点から、陳麗君 (2010b) は台湾中国語の「然後 (…のあとで)」の談話・意味語用論的な新しい文法化機能に注目した。話し言葉の「然後 (…のあとで)」は頻度の非常に高い⁸物語叙述というコンテキストにおいては、ディスコースマーカー (turn-taking・つなぎ言葉・主題の延伸) としての談話機能、および結束性 (coherence) としての機能を果たし、本来の時間順序 (temporal) から、附加 (additive)、因果 (conditional) 関係まで機能を拡張した。ここでは、空間から時間表現へ (metaphorical process)、そして時間表現から意味増加 (semantization) し、さらにディスコースマーカーになる (metonymic process) という語用論的推論がみられた。

本文では共時的な観点により、言語接触による文法化過程にある談話語用論的現象に注目し、台湾中国語の基礎語彙「有 ((て-) ある) (have)」における形態統語的および意味・談話的機能の三つの軸から同時に考察する。

2.1 “有 (ある)” 構文

- (3) 日辰不全，故有孤虛。黃金有疵，白玉有瑕。
(史記・卷一二八・褚少孫補龜策傳)
- (4) 喚出他兩個兒子，兄先弟後，彬彬有禮。(鏡花緣・第八十三回)
- (5) 隨路見花，便採一二枝，編出一個玲瓏過梁的籃子。枝上自有本來的翠葉滿佈，將花放

- 上，卻也別致有趣。(紅樓夢・第五十九回)
- (6) 轎子落在國公府門口，長隨傳了進去。半日，裡邊道：『有請。』(儒林外史・第五十三回)
- (7) 聞簡某系蜀人，而此女亦是蜀人，可謂無獨有偶。(掃迷帚・第十三回)

現代中国語にある“有”構文は古典から伝えられてきた単語あるいは熟語となる「有請」，「有教無類」，「有求必應」以外では、基本的には動詞として用いられる。しかし、張仲霖 (2009: 167-169) は、現代中国語にある“有+VP”構文として“有影響”，“有研究”，“有準備”などを挙げた。これについてはすでに朱德熙 (1982: 60) が述べており、上述した“有”は「准謂賓」動詞とされ、“有”の後ろに名詞か動詞の目的語が来ることができる。一般的に、名詞は直接に名詞を修飾することができるが、動詞を修飾する時には後ろに「的」を付け足さなければならない。しかし、「影響」「研究」「準備」という類の動詞は直接名詞を修飾することができるので、例えば「政治影響」「歴史研究」となり、このような名詞的な働きをする動詞を「名動詞」と分析している。したがって、ここでは、“有影響”といったものを“有+VP”ではなく、“有+NP”と見る。また、劉月華ら (1983) は、基本的に“有”を動詞としたが、「発生・出現」という意味合いで“有+動詞”の構文を挙げた。しかし、そこにある例「近年來中小學教育也有了很大發展 (近年小学校教育では大変大きな發展があった。)」を分析してみると、動詞とされる「發展」はやはり上述した動名詞の働きを持つと捉えることができ、そのうえ、テンスの“了”が“有”に付けている。そのため、呂叔湘 (1999) はこの種の用法を「動詞“有”+(了)」という形式で分類している。これらのことから、現代中国語にある“有”構文は古典から伝えられてきた単語あるいは熟語「有請」，「有教無類」，「有求必應」以外では、基本的には動詞として扱うのが妥当であろう。

しかし、趙元任 (1979) は『漢語口語語法』において、近年広州 (および台湾閩南語) から助動詞

⁸ Since grammatical morphemes commonly develop from lexical morphemes during the process of grammaticization, one striking feature of this process is a dramatic frequency increase (Bybee 2003: 1).

としての“有”(例:你看见他沒有?(彼を見なかったか))が普通話⁹に伝播してきていると述べている。実際、台湾における台湾中国語では、台湾閩南語との言語接触により、助動詞としての“有”の使用が多く見られる。さらに、現在中国では台湾や香港を流行の発信地と見なす傾向があり、これからますます普通話へ影響を及ぼす可能性が大きいと考えられる。

ここでは台湾中国語における“有”の非動詞の語用に焦点を当て、文法化現象における談話機能および一方向性の理論から、“有”が動詞から助動詞に、さらに助詞になる過程を考察する。台湾語に影響された台湾中国語の“有”構文を見出す方法としては、まず中国普通話にない台湾中国語の使用を挙げるために、普通話と台湾閩南語の“有”の用法を対照し、普通話には見られない台湾閩南語の用法を列挙する。それから、台湾閩南語にしか見られない“有”構文を台湾中国語に訳した。さらに、筆者の自省によって台湾中国語の妥当性も検討した。なお、この方法が妥当だと思われるのは、言語接触による台湾中国語の“有”構文の文法化現象が、元々台湾語話者が台湾語文法をそのまま中国語に翻訳して用いるからなのである。

2.2 普通話の“有”の統語形態と意味

普通話の“有”の形態・意味的な分類について、趙元任(1979)は「所有」と「存在」の2種類に分類し、呂叔湘(1999)はその二種にさらに「性質、数量がある程度に達した」を加えて3分類した。劉月華(1983)は「所有」,「存在」,「性質、数量がある程度に達した」,「発生・出現」および「列挙と包含」の5類に分けたが、彼女による新しい分類である「発生・出現」は呂叔湘では「所有表現」に帰属され、「列挙と包含」は呂叔湘と趙元任の「存在」に分類される。本文では包括的且つシンプルである呂叔湘の3分類に従い、先行研究における普通話の表現を以下にまとめる。

⁹ 普通話(現代標準漢語)は中華人民共和国において共通語としての中国語のことを指す。

(1) 所有。統語形態：(S) + “有” + (O)

- (8) 這座橋有兩層(劉)。(この橋は二段階ある。)
 (9) 張老師有很多車(劉)。(張先生はたくさんの車を持っている。)
 (10) 教書這個工作很有意義(劉)。(教学という仕事はとても意義がある。)
 (11) 太陽有九大行星(劉)。(太陽は九つの惑星を持っている。)
 (12) 情況已經有了變化(呂(有+了); 劉(名詞+有+動詞))。(状況には変化があった。)
 (13) 他有著藝術家的氣質(呂)。(彼は芸術家の気品を持っている。)
 (14) 我有事到上海去一趟(呂)。(私は上海へ行く用事がある。)
 (15) 有可能我不去廣州=我有不去廣州的可能(呂)。
 (もしかしたら(私は)広州へ行かない=(私は)広州へ行かない可能性がある。)
 (16) 今年的產品上有所增長, 質量上也有所提高(呂(有+所+V))。
 (今年の製品は増えており, 質も量も高くなっている。)
 (17) 有吃有穿。有說有笑(趙(有+V(賓語)))。
 (食べるものも着るものもある。)(話したり, 笑ったりする。)

(2) 存在。統語形態：時・場所詞 + “有” + (S) / “有” + 了・的

- (18) 屋裡有人(劉)。(家に人がいる。)
 (19) 今天晚上有客(趙)。(今晚はお客さんがいる。)
 (20) 你不愛看, 有人愛看(呂)。(あなたは見たくなくても, 見たい人がいる。)
 (21) 有(的)人愛看京劇, 有(的)人愛看話劇(呂)。
 (京劇が好きな人もいれば, 話劇が好きな人もいる。)
 (22) 有人來看你(趙(兼語式))。(あなたへの尋ね者がいる。)

- (23) 有了(趙)。(あった。)
 (24) 錢有的是(趙)。(お金はかなりある。)
 (25) 銅鏡上刻有花紋(呂(V+有))。(銅鏡に花の模様が刻まれている。)

**(3) 性質, 数量がある程度に達した。統語形態:
 “有” + 量詞 / “有” + 名詞**

- (26) 這條魚足足有四斤(重)(呂)。(この魚はたっぷり四斤もある。)
 (27) 熱帶森林裡的蛇有碗口那麼粗(劉)。(熱帯森林内のヘビは茶碗ほどの太さがある。)

2.3 台湾閩南語と台湾中国語の“有”構文

台湾語の“有”については、村上(2002, 2007)によって6種類「存在, 所有, 確認(…である), 行為が成し遂げる(…した), 不定詞, 動作の達成」が挙げられており、さらに動詞補語としての1種類を合わせて7種類あるとされている。樋口(2000, 2008)は「所有」のほかに、「有」+助動詞+V(ū+beh+V, ū+bat+V)や「有」+形容詞(ū suí), 「有」+V(ū tsiah png bō), 「有」+介詞(ū ka kóng)および動詞補語としての「V+有」+(補語)(thak ū liàu)といった“有”を含む構文を挙げた。以下では、普通話と比較するために、台湾語の先行研究を再分析し、それに合わせて筆者の考案したものを足して、それらを上述した普通話と同じ順番でまとめた。以下のように、普通話の“有”の動詞としての働きとその意味である所有, 存在, 性質・数量の程度((1)~(3)類)は、台湾語にも全部見られる。そのほかに、補助動詞あるいは動詞補語として働いているものを後記にまとめた((5)~(8)類)。台湾語の表記は「臺灣閩南語羅馬字拼音方案」¹⁰の漢字羅馬字交じり表記法で表記する。(以下(1)~(3)類の例文をa.台湾語, b.中国語訳, c.日本語訳の順に並べる。)

(1) 所有

- (28) a. Li 有錶仔 bo? (樋口 2000)

- b. 你有錶嗎?
 c. あなたは時計を持っていますか。

- (29) a. 伊有真濟英語 ê 書 bo? (村上 2002)
 b. 他有很多英文的書嗎?
 c. 彼は英語の本をたくさん持っていますか。

(2) 存在

- (30) a. 學校有四間。(村上 2002)
 b. 學校有四間。
 c. 学校は四校あります。
 (31) a. 厝頂 nih 有粉鳥。(同上)
 b. 屋頂上有鸽子。
 c. 屋根の上にハトがいます。
 (32) a. 有一日。(不定詞) 村上 2002
 b. 有一天。
 c. ある日。

(3) 性質, 数量がある程度に達した。

- (33) a. 這尾魚仔有四斤(重)。
 b. 這條魚有四斤(重)。
 c. この魚は四斤(の重さ)もある。
 (34) a. 這尾魚仔有船赫大隻。
 b. 這條魚有船那麼大。
 c. この魚は船ほどの大きさもある。

以上三つの“有”の形態は普通話と同じ統語的・意味的な使用である。つまり、これらの“有”は動詞であり、そのプロトタイプ的な意味は「所有(持っている)・存在(ある)」である。なかには、さらに「所有」から意味拡張した「性質・数量がある程度に達した」も含まれているが、以下のよ

¹⁰ 台湾の教育部(文部省に相当)は、これまで混雑していた表記法を統合して、2006年10月14日に台湾語の文字表記である「臺灣閩南語羅馬字拼音方案」を公布した。「臺灣閩南語羅馬字拼音方案」は二種類の表記法を統合したものであり、一つは19世紀から宣教師により作られ、大量な文献や辞書を蓄積してきた「教会羅馬字」(通称白話字)という文字システム。もう一つは1990年代に一部の学者により、前者に基づいて改良したものであり、「臺灣語言音標方案」(Taiwan languages Phonetic Alphabet) 通称「臺灣音標」(TLPA) という音声システム(phonetic alphabet)。

うな統語形態は普通話には見られない。(以下の例文(4)～(8)類を a.台湾語, b.台湾中国語, c.語意機能内訳, d.日本語訳の順に並べる。先行研究に挙げた例文の訳は筆者が再分析して訳しなおしたものである。)

(4) “有” + VP

- (35) a.你 有 食 早 起 (ah) bo? (樋口 2000)
 b.你 有 吃 早 餐 (了) 沒 有?
 c.2SG PEF V N(PAST) NEG
 d.朝ごはんを(すでに)食べ ているか?
- (36) a.(伊) 有 娶 bó. (村上 2002)
 b.(他) 有 娶 老 婆。
 c.(3SG) PEF V N
 d.(彼はもう) 妻を 娶っ ている。
- (37) a.昨 昏 你 有 去 看 電 影 bo? (同上)
 b.昨 天 晚 上 你 有 去 看 電 影 了 沒 有?
 c.TIME-N 2SG PEF V VP=NP PAST NEG
 d.あなたは夕べ映画を見てある?
- (38) a.伊 有 tí--leh bo? (樋口 2000)
 b.他 有 在 嗎?
 c. 3SG PAR V INTE
 d.彼は いる か。

以上に挙げた(35)～(38)の例文は、普通話では「你吃早餐(了)沒有?」、「他娶老婆了。」、「昨天晚上你去看電影了沒有」、「他在嗎?」と用いられるのが一般的ではある。つまり、“有” + VP 構文は普通語では用いられない。とはいえ、例(35)「你有吃早餐(了)沒有?」という台湾中国語表現は、台湾の影響を受けた文として中国の普通話流通圏でも許容されるようになってきた。

台湾語における「“有” + V」の語用・意味について、村上(2002)は行為が成し遂げられたことを表すと説明し、日本語の「...した」と訳した。樋

口(2000)は、動作・行為が過去においてあったか、なかったかを問題にする場合、“有”と“bo”は動作・行為を確認する助動詞であると説明したが、村上と同じく、このような“有”構文を日本語の「...した」と訳している。基本的には“有”が助動詞化したということで意見は一致しているが、問題なのは、以上の文を再分析すると、過去のテンスを表すのは“...ah”(した)であり、“有”は過去のテンス(...した)を表すものではないという点である。したがって、“有” + V という文法形態の成立によって、過去のある行為が終了(completive)し、その結果(resultatives)として存在している状態を確認するという概念が生まれる¹¹。つまり、ここでの“有”はアスペクトであると考えられる。

ただし、朱徳熙(1982:70)は中国語の否定成分“没(有)”の品詞について以下のように分析している。“没(有)”が「体詞性(体言的な)」成分の前にくる場合、つまり「“没(有)” + N」の場合は、存在しないあるいは持っていないという意味合いを持つ。また、「謂詞性(用言的な)」成分の前にくる場合は、つまり「“没(有)” + V」の場合は、動作がまだ完成していないあるいは発生していないという意味になる。よって、一般的には、「体詞性(体言的な)」の前の“没(有)”は動詞であり、「謂詞性(用言的な)」の前の“没(有)”は副詞だとしている。これに対して、朱徳熙はこの二者の文法の“位置”が対応していることから¹²、「謂詞性(用言的な)」の前の“没(有)”を動詞と見なしてもいいと示唆した。

しかし、文法の位置が対応しているからといって、“有”を動詞と見なすということは、後接の品詞を無視することになる。そうすると文全体の品

¹¹ Bybee らによると、〈過去〉や〈完了〉の意味と関連する概念には、次の五つがある。A. 終了(completive), B. 完了(anteriors), C. 結果(resultatives), D. 完結(perfectives), E. 過去(past)。 (Bybee *et al.* 1994: Ch. 3)

¹² 文法機能の位置が対応している例は以下である。A (肯定) B (否定) C (否定) D (質問文) E (問題に答える)

有孩子 沒孩子 沒有孩子 有孩子沒有 有～沒有
 去了沒去 沒有去 去了沒有 去了～沒有

詞構成の再構築を検討しない限りは説得性がない。さらに、“没(有)”の後にくる成分は品詞によって異なった意味機能(存在か動作の完成か)を持つことにも説明が付かなくなる。そこで、“有”の品詞を考えたい。文における意味機能と文法機能を両立させることを提案する。上の例で再考してみると、(35)～(37)は動作の完了の確認であるため、“有”の後ろの成分の働きは動詞としか取ることができない。この場合、“有”は動詞のアスペクト—助動詞である。これに対して、例(38)は存在の確認の意味機能であるため、“有”の後ろの“在”は名詞的な成分だと考えられる。したがって、この文の動詞は“有”である。こうすると、文全体の意味と文法機能が関連付けられる。

以上のように、“有”については意味機能の働きに応じた文法的なゆれが生じることが明らかである。また、このような構文の談話機能は、聞き手に事態の終了あるいはその結果状態の確認を求めらるものであり、つまり聞き手の存在を前提とした発話である。

(5) “有” + 助詞 “ka” + V

- (39) a. 你 有 ka¹³ 講 bo? (...した。その行為が成し遂げられたことを表す¹⁴。村上 2002)
 b. 你 有 跟 他 說 沒(有)?
 c. 2SG PEF PAR 3SG V NEG
 d. あなたは 彼に 話し てある?

このように、“有” + VP 構文に、目的語の取り立て詞“ka”を用いることもできる。聞き手に行為の遂行を確認するという談話的機能を持っている。

¹³ “ka”は目的語を動詞句の前に移動させる機能を持つ。つまり文の語順を変えることによって焦点を取り立てる機能が働いている。また、“ka”の後ろの第三人称“伊(彼)”はよく省略される。

¹⁴ 村上(2002)は、この文の日本語訳を「あなたは彼に言いましたか。」とした。

(6) “有” + モーダル + VP

- (40) a. 你 有 bat 去 (過) 台 灣 (ah) m⁻-bat? (経験。樋口 2000)
 b. 你 有(曾) 去 過 台 灣 沒 有? (你有沒有去過台灣?)
 c. 3SG PEF MODAL V PAST PLACE-N NEG
 d. あなたは台湾へ行った経験がある。
 (41) a. Guá 有欲 來去. (未来。...つもり。樋口 2000)
 b. 我 有要 去。
 c. 1SG PEF MODAL V
 d. わたしは 行き たい。(意欲はある)。

例文(40)(41)の普通話表現はそれぞれ「你去過台灣沒有?」「我要去。」である。この類の台湾中国語における“有”構文の文法化過程は以下のような進捗が考えられる。

Guá[有+欲來去].

V + NP

再分析 Guá[有欲+來去]

複合助動詞 + V

このように再分析すると、助動詞“有”は経験助動詞“bat”や意欲助動詞“欲”などと結びつき、複合詞となることでモーダル助動詞として話し手と聞き手の主観を表すことができるようになる。

(7) “有” + 形容詞

- (42) a. 伊 有 嬌 bo? (形容詞の前に、性質・状態の存在を確認する助動詞“有”を備えることがある。樋口 2000)
 b. 她 有 漂亮 嗎?
 c. 3SG ADV ADJ INTE
 d. 彼女は(確かに)綺麗 なのか?

例(42)の普通話表現は「她漂亮嗎?」である。台湾中国語における形容詞を修飾する“有”は、動詞から副詞になる文法化の過程において、本来

の意味の一部のみが抽出され、さらに類推によって意味が増大(semanticized)した。それは、ある物事が持っている性質・状態を認定・断定するような意味変化の過程を示している。その統語形態は古典からの語彙 “有趣” と同じ構造を持っており、語用面では話し手と聞き手の主観的な表現となっている。

(8) V+ “有” (+O)

- (43) a. Guá án-ne 講, 你 聽有 bo? (述語動詞の期待する結果が得られたこと, 得られないことを示す。樋口 2008)
 b. ?我 這樣 說, 你 聽有懂 嗎?
 c. 1ST ACC V, 2ST VP INTE
 d. 私が そういったのを (あなたは) (聞いて) わかりましたか。
- (44) a. 借有 錢。(その動作が達成されたことを表す。村上 2002)
 b. 借有 錢。
 c. ? V COMP N.
 d. お金を 借り られた。

統語形態:

- 他動詞 + “有” + 目的語
 自動詞 + “有”

例(43), (44)の普通話はそれぞれ「我這樣說, 你聽得懂嗎?」「借到錢」であり、動詞「聽」「借」の後ろに「得」や「到」という結果補語を付けて、動作が行われた結果状態を示す。一方、台湾語の “有” は、以上のように動詞の結果補語としての機能を持つ。しかし、このような表現は台湾中国語では使えない。

以上のように, “有” 構文の形態・意味は, 台湾語と現代中国普通話に共通な 1~3 類までの用法を持つほか, さらに 4~8 類の用法が見られた。言い換えれば, 「有+N」構文においては, 動詞として用いる “有” が台湾語でも現代中国語でも見られたが, 「有+V」・「有+助動詞+VP」・「有+助

詞+V」・「有+形容詞」・「V+有」といった “有” を助動詞, 副詞あるいは動詞補語とする表現は中国語には見当たらなかった。また, 台湾中国語では台湾語の影響を受け, 助動詞・副詞になった “有” 構文も口語で用いられる。

ここでは, 半世紀ほどの言語接触によってもたらされた言語の変化, つまり文法化を引き起こす動機と言語の能動性を提示した。その結果, “有” の文法化過程は次のようなモデルで示すことができる。モデルに示したように, 意味・語用の推論発展によって, 所有という動作の意味が希薄化し, 動作の終了や結果状態, 物事の性質の所持状態の確認という新しい意味が生まれている。つまり, 話し手と聞き手との相互作用という観点への再編成によって一つの意味が漂白(bleaching)し, 別の意味で置き換えられるという主観化の過程を示唆している。

(45)
 意味的

所有・存在 > 動作の終了・結果状態／性質の所持の確定; 主観化

形態統語的

動詞 “有” > 動詞: “有” + NP;
 助動詞: “有” + (助詞) + VP; 副詞: “有” + AP

語用的

叙述的 > テキスト的; 表現的 (話し手と聞き手の相互作用を前提とした “確認”)

以上をまとめると, 台湾語との言語接触の結果, 中国語の “有” は語彙項目 (内容を表す語) から文法的 (機能を表す語) になったと言える。意味

上では所有・存在から動作の終了と結果状態および物事の性質の所持の確定となり、統語形態上は自立詞動詞から補助的な動詞や副詞となった。さらに、語用では、叙述から話し手と聞き手の相互的な作用という談話機能を前提とした話し手の態度を示すという主観化した表現機能が見られた。

3. 結語

言語は絶えず変化するものである。本稿は言語変化とその伝播性のもたらすメカニズムを解明するため、他(多)言語との言語接触によって生じた台湾語と中国語の言語変化について音韻系統・語彙・統語形態および語用論的に考察した。文文化現象の考察では、意思伝達を図る話し手と聞き手の役割に注目している。コミュニケーションを図るためには、経済化(economy)と簡約化(simplicity)を最大限に生かすことは言うまでもないが、聞き手の役割について、基本的には、最小限の区別によって最大限の効率を生み出すことと、情報を最大限に生かすことの二つが重要である(Langacker 1977:106)。話し手の役割について考えるとき、表現の凝縮・境界線の喪失・余分なことばの簡約化は、普通の言語環境においてはほぼ同じことを新しい言い方で表すことによってバランスが保たれる。そのような新しい言い方は、話し手が表現性を高めようとすることによってもたらされる(Hopper and Traugott 2003:81)。その事実を語るのは本文で示した音声系統の簡約化であり、新しい語彙を取り入れることで表現性を高めようとし、“有”の新しい文法形態で主観の確認を表せるようになることである。これによって、聞き手に対する情報内容を高め、話し手の会話状況に対する態度を表すという二つの語用的な表現機能を果たすことができる。しかし、台湾中国語の助動詞化した“有”の使用は現在公文書や正式場面の書物にはほとんど見られない。その理由について、この用法がメディアの影響による流行的な慣用語であり、規範的ではないもしくは間違った使い方であるためだとする研究もある(張

仲霏 2009:172, 奥谷 2005:69)。だが、これまで多くの通時的な文文化研究で行われてきたように、言語とは話し手による長い運用の歴史を経て築き上げてきたものである。また、グローバリゼーションの長短所は別として、その伝播は基本的にメディアによるものである。したがって、このような文文化一過程に見られた文文化現象は談話的・語用的な機能の考察を抜きにしてはならないことを最後に強調したい。

謝辞 本研究は東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の客員准教授として滞在中に行ったものである。また、本稿は2011年2月19日に行われた山形大学人文学部国際学術講演会「共振する東アジア2 —東アジアの言語の将来—」での発表内容をもとに、加筆修正したものである。講演会でさまざまなご意見をくださった方々に感謝申し上げます。

参考文献

- 奥谷道弘 2005「台湾で使われる中国語の特徴に関する一考察—閩南語と標準中国語の“の”の使い方を比較して—」『天理インターカルチャー研究所研究論叢』13:51-72。
- 王育徳著, 近藤明理訳 2011『「昭和」を生きた台湾青年—日本に亡命した台湾独立運動者の回想 1924-1949』東京:草思社。
- 川見駒太郎 1942「台湾に於て使用される国語の複雑性—附, 方言の発生」『日本語』2(3), 31-42。
- 張仲霏 2009「現代中国語における“有”+VP構造について」『神奈川大学人文学会誌』169, 165-188。
- 樋口靖 2000『台湾語会話 第二版』東京:東方書店。
- 2008「台湾閩南語における状態補語の用法」『東京外国語大学論集』77, 31-45。
- 日野資成 2001「形式語の研究—文文化の理論と応用—」福岡:九州大学出版会。

- 村上嘉英 2002 『CD エクスプレス台湾語』 東京：白水社。
- 2007 『東方台湾語辞典』 東京：東方書店。
- 劉月華, 潘文娛, 故韡著相原茂監訳 1991 『現代中国語文法総覧 (下)』 東京：くろしお出版。
- 趙元任著 呂叔湘譯 1979 『漢語口語語法』 香港：商務印書館。
- 呂叔湘 1999 『現代漢語八百詞』 香港：商務印書館。
- 朱德熙 1982 『語法講義』 北京：商務印書館。
- 1990 『語法叢稿』 上海：上海教育出版社。
- 黃宣範 1995 『語言, 社會與族群意識』 台北：文鶴出版社。
- 陳麗君 2007 「主述構造, 信息構造和語碼轉換句之間的功能對應」 『社會語言學與功能語法論文集』 pp.229-246. 台北：文鶴出版社。
- 2010a 「台灣語言的日語借詞」 文化研究學會 2010 年會「文化生意：重探符號／資本／權力的新關係」, 台南：成功大學。
- 2010b 「當代台灣大學生口語中「然後」的談話以及篇章功能」 日本中国語学会第 60 回全国大会, 東京都：神奈川大学。
- 2010c 台灣南島語族 ê 鄒族語言使用 kap 語言能力。台語研究, 2(1), 4-27。
- Bybee, Joan L. 1985. *Morphology: A Study of the Relation between Meaning and Form*. Amsterdam: Benjamins.
- Bybee, Joan L., and Östen Dahl. 1989. The creation of tense and aspect systems in the languages of the world. *Studied In Language* 13: 51-103.
- Bybee, Joan L. 2003. Mechanisms of change in grammaticization: the role of frequency. In Joseph, Brian D., and Richard D. Janda ed. *The Hand Book of Historical Linguistics*. 1-43
- Cheng, Robert L. (1985) . A comparison of Taiwanese, Taiwan Mandarin and Peking Mandarin. *Language*, 61(2), 352-377.
- Givón, T. 1979. *On Understanding Grammar*. New York: Academic Press.
- Langacker, Ronald W. 1977. Syntactic reanalysis. In Li, ed., 57-139.
- Lehmann, Christian 1982. *Thoughts on Grammaticalization: A Programmatic Sketch*. Vol. I (Arbeiten des Kölner Universalien-Projekts 48). Köln: Universität zu Köln. Insitut für Sprachwissenschaft.
- Heine, Bernd, and Mechthild Reh. 1984. *Grammaticalization and Reanalysis in African Languages*. Hamburg: Hlemut Buske.
- Heine, Bernd, Ulrike Claudi, and Friederike Hünemeyer. 1991. *Grammaticalization: A Conceptual Framework*. Chicago: University of Chicago Press.
- Hopper, Paul J., and Traugott, Elizabeth Closs 1993. *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Li, Charles N., and Sandra A. Thompson. 1976. Development of the causative in Mandarin Chinese: interaction of diachronic processes in syntax. In Shibatani ed.: pp. 477-92.
- Yeh, His-nan, & Chan, Hui-chen, & Cheng, Yuh-show (2004). Language use in Taiwan: Language proficiency and domain analysis. *Journal of Taiwan Normal University: Humanities & Social Sciences*, 49(1), 75-108.
- Young, Russell. (1989) . *Language maintenance and language shift among the Chinese on Taiwan*. Taipei: Crane.

Language Contact and Grammaticalization: A case study of the *YOU* (有)-structure in Taiwan Mandarin

Tan, Lekun

(Department of Taiwanese Literature, National Cheng Kung University)

This study focuses on language contact between Japanese, Mandarin and Taiwanese. In this paper, phonological change, word borrowing, and code-switching (aspects that derive from the language contact phenomenon) are studied and analyzed in light of the theory provided. In the same line, the process of lexical and grammatical change that develops from the language contact phenomenon (also known as “Grammaticalization”) is covered in detail. We take the example of the Creole-Taiwanese Mandarin *YOU*-structure and analyze it from a semantic, morphosyntactic, and pragmatic perspective. Lastly, we use the assumption of unidirectionality and the content of subjectification proposed by Hopper and Traugott to try to explain the grammaticalization of the *You*-structure.

Key words: Language contact, Grammaticalization, Borrowing, Unidirectionality, Subjectification